



## 住総研だより 第23号 (2015 (平成27) 年秋号)



10月9日に開催された住総研シンポジウム(会場:和敬塾)の様子(2~3頁参照)

### 目次:

最近の動き	1
第43回 住総研シンポジウム	2
第84回 すまいろんシンポジウム	4
住総研 出版物 WEB公開開始	4
2016年度研究助成・活動 助成/出版助成募集中	5

### 最近の動き

#### ●理事会で平成27年度上半期の事業報告

去る10月30日の理事会で、平成27年度上半期の事業報告と、新たな研究運営委員として後藤治氏(工学院大学教授)の選任が議決された。

#### ●2016年度研究・実践助成の募集開始

10月1日から平成28年度住総研 研究・実践助成の募集を開始した。今年から実践助成部門も設けられ、共通の重点テーマは、「住まい手から見た住宅の使用価値」。さらに今年度は研究助成の「特定課題」として(一社)移住・住みかえ支援機構のデータを利用した研究も対象として募集中。応募締切は平成28(2016)年1月31日(日)。(詳細は5頁参照。)

#### ●出版助成募集中

今年8月から募集開始している出版助成の応募は来年1月31日で締切る。(詳細は5頁参照。)

#### ●第43回住総研シンポジウムを開催

2015年度重点テーマ「受け継がれる住まい」の第2回住総研シンポジウムを10月9日(火)に旧細川侯爵邸の和敬塾本館(見学会も実施)にて開催した。司会は内田青蔵氏(神奈川大学教授)、講演を竹原義二氏(建築家)、木村忠紀氏(大工棟

梁)、梅本舞子氏(千葉大学特別研究員)、碓田智子氏(大阪教育大学教授)、コーディネーターを松本暢子氏(大妻女子大学教授)が務めた。参加者は見学会21名、講演会49名。参加費等で集まった48,500円は東日本大震災被災地へ義援金として寄付の予定。(詳細は2~3頁参照。)

次回第3回は来年3月4日(金)に武庫川女子大学甲子園会館(兵庫県西宮市)で開催する。

#### ●住総研アーカイブの公開

住総研が過去に発刊した報告書等を10月から当財団ホームページにて「住総研アーカイブ」として公開を開始した。(詳細は4頁参照。)

#### ●すまいろんシンポジウムを開催

住総研では機関誌『すまいろん』を来年2月、5年振りに復刊する。それに先立ち「すまいろんシンポジウム」を11月2日(金)に開催した。テーマは「賃貸住宅再考」。大月敏雄氏(東京大学大学院教授)の司会のもと、講演を尾神充倫氏(都市再生機構)、片岡八重子氏(ココロエ代表)、浅香充宏氏(ベガ代表)で行い、38名が参加した。(詳細は4頁参照。)

『受け継がれる住文化-和の住まい・和の住生活』

2015年10月9日(金) 見学会11:00~12:00/講演会13:30~17:10  
 和敬塾本館(東京都文京区)  
 見学会講師・趣旨説明: 内田青蔵(神奈川大学 教授/住総研研究運営委員会 委員長)  
 講師: 竹原義二(無有建築工房 主宰)  
 木村忠紀(株式会社木村工務店 代表)  
 梅本(切原)舞子(千葉大学大学院 特別研究員)  
 碓田智子(大阪教育大学教育学部 教授)  
 コーディネーター: 松本暢子(大妻女子大学社会情報学部 教授)



内田青蔵氏



竹原義二氏



木村忠紀氏

本年度の住総研シンポジウムは、「受け継がれる住まい」をテーマとしている。3回のシンポジウムで、私たちの住環境や地域社会をどう継承していくべきかを議論し、「受け継ぐこと」を当たり前のこととして導く社会を目指す。10月9日に行った第2回目のシンポジウムは、和敬塾本館(旧細川公爵邸)にて開催。生活を含めた住文化に焦点を当て、日本の伝統的な住まいの魅力に迫った。

本年度のテーマ発案者である内田青蔵氏は、「現代の日本の住宅において、和室は消失しつつある。それは単に物理的な減少だけではなく、和室にともなう和の文化の消失である」と警鐘を鳴らす。内田氏の基調講演では、戦前の日本住宅における和と洋のあり様を時系列に捉え、和洋融合の歴史を解説した。中でも当時の建築家たちによる和洋折衷の創意工夫は、日本の気候風土の中で生まれた伝統を大事に継承しつつ、和と洋の境界線を消し去った新しい試みであるとして注目した。日本の住文化再考にあたっては、変わらずに継承すべきものと、変化しながら継承していくものを改めて捉え直す必要があると述べた。

●竹原義二「和の住文化の継承とその実験」

竹原氏は「今、自分の住まいについて、胸をはって誇れると言える人はどれ位いるだろうか?」と、会場に問いかけた。例えば、人を招き入れる時のしつらえは、料亭に限らず、一般的な家にも必要だと話す。石に水を打って人を迎えるという古くからの習わしには、石の材種や敷き方、目地、何れも欠かせない要素となる。また、人を迎え入れる玄関とはどういうものか、その扉はどうあるべきか、上がり框や、視線の先にある壁の仕上げ等、その全てが人を迎える所作に関わってくるという。それゆえ、素材は経年変化によっ

て素材の良さが増す様なものを選び、職人の手間を惜しまないこと。人を招き入れる時、お茶を差し出す時、自分の子どもと話をする時、折々に「和のものさし」を用いて対話のできる住まいは、自然と住み継がれていくのではないかと話した。

●木村忠紀「大工職から見た技術の継承」

約50年間大工職に携わる木村氏は、和の継承を「技術」という角度から話した。木村氏によると、日本の木構造は鎌倉時代以降に大きく発展したという。それは貫のめり込みによって軸組を持たず構法で、それが日本で培った伝統的な構法といえる。しかし近代以降、筋交や面材によるブレス構造と大きく二つの道に分かれ、昭和25(1950)年の建築基準法制定の際は、貫による構法は耐震要素が評価されず完全に否定されてしまった。また職人の技術も、明治中期をピークにどんどん下がってきていると指摘。その要因の一つは、道具から工具への変化だ。使う職人の手に合わせて使う人間が作り上げる道具は工具へと変わり、技の質をどんどん落としているという。二つめは施主の意識。家は作る時代から買う時代へと変化し、部位ごとにパーツ化されたキットのようなものへと変化した。しかし、工業化された製品を組み立てるだけの仕事では、大工は技を継承できない。若い大工が本当にやりたいと思う「ほんまもの仕事」を生むことで、技は自然と継承されると会場に訴えた。

●梅本舞子「床上文化と和の継承」

梅本氏は、和室の設けられ方とその使い方調査を通して、これからの和の住まいの有り様を見据えた。具体的な調査対象は、サラリーマンで、新たな地に開発された郊外の一戸建て住宅地に住む地縁血縁が薄い

遊動層。つまり、最も和の要素を継承しにくい人たちの生活に、和の要素の変化をみていく。先ず明らかな変化は、和室の激減である。2000年前後、和室がない住まいは1/4程度あり、1980年代には85%の家にあった床の間は、現在15%にまで減少。また、かつては玄関脇の応接間が唯一の洋室であったのに対し、今は玄関脇の一室のみが和室で、ここが接客のハレの空間として意識されているという。現代の住まいは、第三者との関わりが希薄で接客空間としての存在基盤が薄まった。この変化に伴い中廊下型から居間中心型へと住まいは変化し、家族の空間であるリビングと和室が連続するタイプが急増している。しかし、こうした変化の一方で、和室へのニーズは依然として高いという。和室を持たない層でも、「やはり和室は欲しかった」、「床の間を設けたかった」とする回答はあり、和室の様々な用途に対応できる融通性の高さに評価が集まっているとした。

#### ●碓田智子「伝統建築文化と住教育」

かつては家にあった当たり前のものが、今は学校の教科書の中で学習し知識として身につけるものになってきた。現行の学習指導要領の中には「伝統や住まいに関する教育の充実」との柱があり、学校の教科書で、住まいや住文化を学ぶ機会は増えた。しかし碓田氏の調査では、大学生でも和室の基本要素（床の間、敷居、鴨居など）が何なのかさえも分からなくなってきているという。住文化の理解度は、和室の有無や、祖父母との接触の度合いが大きく影響する。しかし今、そうした条件が整う家庭は多くはない。和の住まいや生活は、自然と伝承されていくものではなく、何らかの働きかけが必要になると話す。そこで碓田氏は、重要文化財の民家「伊佐家住宅」で住生活についての聞き取り調査や、地域の人に伊佐家住宅を知ってもらおうようなミニ講座等のイベントを開催している。こうした活動を通じて和の生活を知ってもらい、地域の理解と共に重要文化財の維持管理を進めていくのだ。また最後に、今暮らしている洋風の住まいもまた、連綿と続く歴史や文化の上にあることを子どもたちに理解してもらおう必要があると話した。

#### ●ディスカッション

ディスカッションでは、「本当の和とは何か」という投げかけから、何が「和か」ではなく、「何を受け継ぐのか」を掘り下げる必要があるとして議論が進んだ。その中で竹原氏は、「なかなか受け継ぐことができないのは、住んでいる家があまりにも貧しすぎるから。その中で住文化の継承といっても空振りするだけ」と、先ずは今の住まいを見直すことだと喚起した。また会場の祐成氏は、若い時に無理をして長期ローンを組んで買う住宅が、消耗品ではない住宅のあり方と、持ち家との相性があまり良くないのではないかと、借家システムの見直しを提案。継承を考えるにあたっては、まず現代の働き方や暮らし方こそ見直しの必要があると祐成氏は続けた。

また継承にあたっては、「文化というのはキャッチボール。住むという文化に対するキャッチボールができていないから、その文化は停滞している。和か洋かという話を越えて、人間が住むということが一体どういうものであるのかを掘り下げてキャッチボールしなければ」（木村）、「空間のみならず日本人らしさとは何か。言葉以外の非言語のコミュニケーションを大切にするというのが日本人らしさであり、引き継ぐものではないか」（梅本）、「和の住まいや住文化は家庭生活の中では受け継ぐことが難しくなっている。一時的なものではなく、継続的な機会を設けて日本人の文化力を底上げしなければ和の文化は残っていないのではないか」（碓田）と、登壇者のそれぞれの想いの中にコミュニケーションの重要性が表れた。

最後に内田氏は、「日本は独自のモデルを作る時代がようやく来た。和の文化、和の住まいをもう一度きっちり評価し、そういうものの中からものづくりができる時代へ、今こそ議論をしていく時期である」と、住文化継承における継続的な議論の必要性をあらためた。司会の松本氏は「住まいというのは、自分の生活を映し出し、具現化した存在である」と、住まいに対する教育の機会や底上げしていくための仕組みの重要性を再確認をした。その中で、本物の家を継承し、それを維持していくことの中から「ほんまもの仕事」を継承していきたいと、今回の議論を纏めた。



梅本舞子氏



碓田智子氏



松本暢子氏

2015年11月2日（月）14：00～17：00 建築会館301・302号室（東京都港区）

趣旨説明： 大月敏雄（東京大学大学院 教授）

講演： 尾神充倫（独立行政法人都市再生機構）

片岡八重子（株式会社ココロエ 代表/NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト）

浅香充宏（株式会社ベガ 代表/フィオーレ喜連川管理組合）

空き家が増える中で、家を所有することだけが本当に豊かな生活を保障する唯一の選択肢なのだろうか。また手軽に用途を転換することが容易で、地域に新たな息吹をもたらす可能性を秘めた賃貸住宅がテコとなって地域が再生するケースが増えているのも事実である。また、リノベーションによって、社宅や寮や公的賃貸住宅すらも、シェアハウスやサービス付き高齢者向け住宅といった形の賃

貸住宅に生まれ変わりつつあり、若者を地方に呼び込むための新たな賃貸住宅も必要とされている。いまひとたび賃貸住宅に焦点を当て、その可能性について再考した。

平成28（2016）年2月に賃貸住宅再考を特集テーマとした『すまいろん』を5年ぶりに復刊する。（大月敏雄委員長・事務局編）

## 住総研出版物WEB公開開始

10月より「住総研アーカイブ」として、既にインターネット上で公開済の『住総研研究論文集』、『ハウスアダプテーション通信』等につき、以下の出版物をインターネット上での公開を始めた。（一部を除く。）

1. 『すまいろん』
2. 『住総研レポート すまいろん』
3. 『「住まい・まち学習」実践報告・論文集』
4. 『住・まちづくりフォーラムかわら版』
5. 『高齢者のすまいづくり通信』
6. 「江戸東京住まい方フォーラム記録」
7. 『小規模マンション管理の課題と解決策に関する調査報告書』
8. 『コレクティブハウジング研究報告書』

### 9. 『賃貸集合住宅コミュニティ活性化研究会報告書』

### 10. 『在来構法の研究』

利用方法は、住総研トップページより、住総研アーカイブボタンでアクセス可能。（下記参照。）どなたでも無料で利用できるのは是非、ご活用下さい。

なお、公開に当たっては、8月より当財団ホームページに著作権許諾のお願いの文書を公開するとともに、関係者へメールまたは郵送にて告知している。公開後も執筆者等から公開に支障がある旨の申出があった場合は、公開中止または変更等に対応している。

### 住総研アーカイブへのアクセス方法

(1) トップページ左indexの「住総研アーカイブ」ボタン（赤囲み部分）をクリック。

(2) 「住総研アーカイブボタン」ページが開くので各出版物のページへアクセス。



## 2016年度研究・実践助成／出版助成募集中

※いずれも2016年1月31日(必着)締切。

今年度より従来の『研究助成』に加えて、新たに『実践助成』の募集を開始しました。「住生活の向上に寄与する活動」とし、学術的な研究を伴う試行中または運営中の実践活動に対して助成します。皆様のご応募お待ちしております。

### 2016年度 出版助成

「出版助成」では、「住生活の向上に寄与する内容」で、未発表の出版に要する経費の一部を助成します。  
(参考 2015年度実績：3件)

#### ●募集概要

##### 1. 応募資格

- 1)個人またはグループとし既存の団体・組織を除く。
- 2)同一年度内は、申請者1名につき、1著作物までとする。

##### 2. 主な条件

- 1)出版経費は、編集・印刷・製本・用紙代などの直接生産費に限る。
- 2)出版された書籍を受領後、出版社に対して当財団が、助成金を直接支払う。
- 3)出版後、販売普及活動の推進をお願い致します。

また、住総研が主催する出版シンポジウムの講演を依頼することがある。

##### 3. 助成件数 2～3件程度

##### 4. 助成期間 平成28(2016)年7月～平成29(2017)年9月までの15ヶ月間。

##### 5. 助成金額 1件あたり80万円(税込)を上限。

##### 6. 募集期間 平成27(2015)年8月1日～平成28(2016)年1月31日(必着)

### 2016年度 研究・実践助成(実践助成は今年度新設)

「研究・実践助成」では、住関係分野における研究の発展や研究・実践者の育成および支援の観点から、将来の「住生活の向上に寄与する研究」で、学術的に質が高く、社会的要請の強いまたは先見性や発展性が期待できる「研究・実践活動」を公募します。成果は、『住総研 研究論文集』または『住総研 実践活動報告集(仮)』に収録・発刊すると共に、提出された論文・報告書から、毎年2～3件を選び「住総研 研究・実践選奨」を贈り研究発表の機会を設けています。(参考 2015年度実績：20件)

#### ●募集概要

##### 1. 助成テーマ

対象のテーマは、「住総研の重点テーマに係わるもの」と「自由テーマ」のいずれでも可とします。  
年度重点テーマとは、その年度の住総研の活動の焦点となるもので、本年度は以下の通りです。

**2016年度重点テーマ「住まい手からみた住宅の使用価値(Value-in-Use)」**

※今年度は重点テーマの中の「特定課題」もあります。

(特定課題に関する問合せ受付は11月20日で終了しました。)

##### 2. 応募資格

- 1)当該研究のためのグループとし、個人・既存の団体・組織を除く
- 2)英語での応募の場合は、日本語サマリー(A4版1枚とする)を提出

##### 3. 助成件数 研究・実践助成あわせて20件程度

##### 4. 助成期間 2016年6月～2017年10月までの17ヶ月間

##### 5. 助成金額 1件あたり100万円を上限

##### 6. 募集期間 平成27(2015)年10月1日～平成28(2016)年1月31日(必着)

出版助成、研究・実践助成ともに、詳細は、以下のページをご覧ください。(住総研「助成事業」ページ)

<http://www.jusoken.or.jp/josei/index.html>

## 最近の行事より



第43回  
住総研シンポジウム  
(会場の和敬塾本館  
見学会)の様子



第84回すまいろん  
シンポジウムの様子  
(4頁参照)

編集後記:2010年4月に創刊した「住総研だより」は、今号をもって休刊し、今後は2016年2月復刊の『すまいろん』に統合することになりました。『すまいろん』は2011年冬号(No.97)で休刊していましたが、復刊を希望する声を沢山頂いており、この度年2回発行の予定で再スタートしますので宜しくお願い致します。

約5年の短い間でしたがこの間、当財団の一般財団法人への法人移行、そして東日本大震災という大きな出来事が起こりました。今年9月に震災後初めて東北へ行きましたが、現地の方々の声を聞いて、改めて震災時の苦労や想いを感じました。震災から4年半が経ち、被災地以外では風化してきているという声も聞きますが、今後もイベント等をきっかけに再考する日を設けることが大切だと改めて思いました。最後になりますが、これまで「住総研だより」をご愛読頂きありがとうございました。(K)

## 住総研だより 第23号

発行日 平成27(2015)年11月30日  
発行人 道江 紳一  
発行所 一般財団法人 住総研  
〒156-0055 東京都世田谷区船橋4丁目29-8  
電話 03(3484)5381  
FAX 03(3484)5794  
E-mail info@jusoken.or.jp  
URL <http://www.jusoken.or.jp/>

住総研は「住まい」に関する研究助成事業を中心に、「住総研研究論文集」等を発刊、また住に関する専門図書室、シンポジウム・セミナーの公開開催など、社会のお役に立つような事業につとめています。

この「住総研だより」は、当財団の活動を研究者、市民の皆様により広くご理解頂くとともに、意見交流の場になることを願って配信します。ご利用宜しくお願い致します。

「住総研だより」編集担当